

救急病床の役割について

看護部運営委員 3N病棟師長 梅川 由紀



当院は8日ごとの病院群輪番制で、二次救急を担っています。突然の入院を余儀なくされた患者さんが良質で安全・的確な医療が受けられるように、また、患者さんだけでなく家族の方々が安心して療養を見守ることができるように、手術部・ICUと同じフロアの3N病棟に「救急病床」を設けました。

この救急病床は、救急日の夜間帯に入院される患者さんを対象にしています。夜間入院を集約することで、すでに入院生活を過ごされている患者さんの安眠や安静・安楽に繋がること、また、病棟スタッフの通常業務に上乗せされる業務負担の軽減を図っています。

救急夜間帯の救急病床では、多種多様に対応できるスタッフを増員し、看護の質と効率性を向上できる体制を整えています。救急を担う病院として、容態変化や生理学的な異常を捉えるアセスメント力やリスクマネジメント的看護の視点を持ち、「的確に・迅速に・安全に」多様な対応ができるように取り組んでいきたいと思えます。

また入院後は、メディカルスタッフと連携を図ってチーム医療を展開し、入院サポートや地域医療連携室、訪問看護課を通して早期に社会復帰できるように支援いたします。地域住民の皆様が安心して治療に臨め、今後もより快適な環境のも

とで入院生活が送れるように努めてまいります。

現在は、救急日の夜間入院として救急病床を運用しておりますが、今後は時間外での入院の受け皿としての役割も考慮し、更に充実を図り地域医療に貢献できるように考えております。



当院における緩和ケア

緩和ケアチーム

外科部長 木村 真士



2007年にがん対策基本法の施行、がん対策推進基本計画の公示があり、当院においても同年8月に医師、看護師、薬剤師、作業療法士、理学療法士、管理栄養士、社会福祉士の多職種で構成された緩和ケアチームを立ち上げ、活動を行ってきました。主に、がん患者さんのがん末期における種々の身体的症状の緩和を重点にケアを行ってきましたが、2013年からは臨床心理士も加わり、心理的サポートも可能となりました。

主な活動対象は入院患者さんです。残念ながら当院には緩和ケア病棟はありませんが、新5棟の2階にがん患者さんとそのご家族を対象としたがんサロンを整備しています。がんサロンの名称は「リエール」です。リエールはフランス語で「つた (ivy)」ですが、この花言葉は「永遠の信頼」です。がん患者さんやそのご家族と私たち松山市民病院との交流を通じて、永遠に信頼できる関係を築いていきたいという願いを込めてサロンの名前としました。明るく温かい場所になればと願っています。

今後も主に入院患者さんを対象に緩和ケアを実践していく予定ですが、ご依頼があれば外来患者さんのケアにも取り組みたいと考えておりますので、ご遠慮なくご相談ください。



Close Up お仕事 拝見

電話交換室

電話交換手：白賀千恵、中村廣子、加藤敏子

当院の電話交換室は3名体制で、2機の交換台を交替で担当しています。病院にかかってくる電話は1日約400件前後ですが、8回線すべてが一斉に鳴ることもあり、連休明けや年末年始などは件数が倍ほどになることもあります。

外線受信の場合、どの診療科に接続希望かをお聞きし、間違いを防ぐために必ず復唱します。つなぎ先が不明な場合や患者さん以外の電話は接続先が多種多様なため、内容をお伺いし、マニュアルを確認しながらつないでいます。

また、迷惑電話等の情報は交換室だけでなく、総務課、医療事務部、守衛室とも情報の共有化を図り、誤ってつなぐことがないように注意しています。クレームや問題が発生した場合は言葉に気をつけながら事態を悪化させないよう相手の話を傾聴し、関係部署長に報告の上、対応をお願いしています。

交換業務は電話をつなぐだけの簡単な仕事と思われがちですが、医療現場のサポートとバックアップを担う役割であり、繁忙な現場で迅速かつ正確な対応をするためにはどうすればよいかを常に考えて行動しています。

患者さんや病院スタッフから「助かりました。」と言っていただけのことや無駄になることもある履歴のチェックや登録が役立ったときはこの仕事にやりがいを感じます。今後も患者さんの立場と視線に立つことを忘れず、病院の声の窓口として丁寧な対応を心がけていきたいと思えます。

